

# エコツーリズムによる震災復興支援 —三陸・宮古における1000年の絆を紡ぐエコツアー—

Earthquake Reconstruction Assistance through Eco-Tourism – Eco-Tour of the Cosmos of Kagura and Narrative of 1000-Years-Treasure

海津ゆりえ\*  
Yurie KAIZU

## 1. はじめに

三陸沿岸は、記録に残っているだけでも貞観時代より幾度も大地震と大津波に見舞われてきた「地震・津波常襲地」である。しかし、いつの災害の後も人々は住み続け、津波の猛威に遭遇しながらも留まることをやめなかった。生活という日常と、地震・津波という非日常の間を生きてきた人々に対して、観光研究者に何ができるのか。本プロジェクトはこの問いから始まった。

沿岸域に観光資源の多くが集中していた被災地では、レストハウスやキャンプ場、遊歩道、宿泊施設などの施設系を中心とする観光インフラが津波によって軒並み破壊され、三陸の従来型観光の復興は当分先のことと思われる。しかし目を転じると、後背にそびえる山々や海の青さは美しさを湛えている。穏やかになった海は「50年前に戻ったよう」と三陸の人が言うほど澄んでいる。言葉の端々に浮かぶ東北の人々のやさしさや温かさはそのまま、ここから再生が始まるのだと確信できるほどの「力」があると思えた。被災によって多くを失った人々を支えるのは、第一に自然や文化などの地域の宝であり、第二にそれを再認識させてくれる外からの支援や人々の関心であろう。その循環を少しでも経済に結び付けることができれば望ましい。そしてその活動が楽しければ持続するはずである。筆者らが専門とする「エコツーリズム」や「宝探し」は、そのコンセプトを具体化する手法である。筆者らは次の5つを理念としてプロジェクトを開始した。

- ①震災を経てもなお残る被災地の資源に着目する
- ②被災地の人々が住み続けるエネルギーに結びつくものとする
- ③地域外の人々が被災地を直接応援することができるものとする
- ④地域の人材を活用し、経済に結びつくものとする
- ⑤復興期を過ぎても持続的な地域創造に資するものとする

ここで簡単にエコツーリズムと宝探しについて説明しておく。エコツーリズムは、地域の自然や文化等賦存の資源の活用と、資源の保全、地域活性化を循環させる観光である。宝探しはその資本となる資源(=宝)を住民参加で探し、磨き、誇り、伝える運動である。岩手県二戸市で1992年から開始し、同市で手法が確立された(表-1)。

対象としたのは岩手県宮古市である。松島と並ぶ三陸の代表的観光地、浄土ヶ浜をもち、壊滅的な被害を受けた田老や、最高津波到達地点の姉吉がある自治体である。我々と宮古市を結びつけたのは、岩手県二戸市であった。筆者らは、同市が上述した1992年から続けている「宝探し」の外部アドバイザーとして20年に及ぶ関わりを有しており、同市は内陸都市として宮古市を支援する立場にあった。

筆者らは観光研究者やプランナー、二戸市職員、文教大学・立教大学の学生ら約20名のチーム(「宮古エコツーリズムプロジェクト(通称MEP)」)を組み、「1000年の絆を紡ぐエコツーリズム調査」と名付けて次の3つのステップで活動を開始した(図-1)。1000年というのは、貞観地震から数えて千年を越え、宝が受け継がれて来た歴史を意味している。

体制は二戸市の仲介により宮古市商業観光課をカウンターパートとし、震災直後における市内の各機関、各主体への連携は同課を介

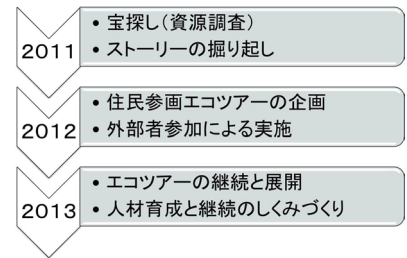


図-1 プロジェクトの流れ

して紹介を受ける形をとった。プロジェクト経費は日本観光研究学会の東日本大震災復興支援特別研究費(2011年度)と株式会社JR東日本ウォータービジネスおよびNPO法人日本エコツーリズム協会、岩手県二戸市による助成(2012年度)を活用した。

## 2. 宝探しの成果(2011年度)

### (1) 黒森神楽の風景

宮古の宝として最も注目したのは、「黒森神楽」であった。黒森神楽とは、宮古市山口にある黒森山中腹に位置する黒森神社(写真-1)を本拠地とする神楽である。他の東北の神楽と同じく神楽衆は黒森神社で神を遷された獅子頭(「権現様」)を携えて集落を廻り、五穀豊穡や大漁などを祈願する。

黒森神楽は他の神楽にはない独特のスタイルを保っている。通常、神楽は神社の氏子衆が住む範囲(カスミ)内で舞うが、黒森神楽

表-1 宝探しの5段階

段階	内容
探	宝を探す 地域固有の自然、歴史、文化、産業、人などの資源を地域住民自身が発掘・再発見する
磨	宝を磨く 発掘・再発見された宝を保存・伝承・発展させるための活動
誇	宝を誇る 宝の価値を認識し、地域の中で価値認識を共有するための活動
伝	宝を伝える 地域の外に向かって宝を発信するための活動
興	宝を興す 宝を活用して産業に結びつけるための活動

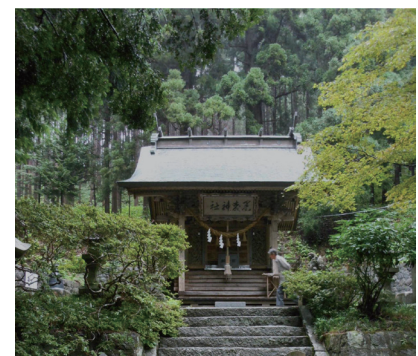


写真-1 黒森神社

\*文教大学国際学部

は毎年1月3日の舞立ちが終わると山口集落を出発し、概ね3月初旬までの間、三陸沿岸一帯を巡行するのである。宮古市以北の岩泉町、野田村、普代村、田野畑村、久慈市までを回る北廻り巡行ルートと、宮古市、旧新里村、山田町、大槌町、釜石市等を回る南回り巡行ルートを毎年交互にたどる。各集落では個人が自宅を「神楽宿」として神楽衆を出迎え、食事を提供し夜神楽の夕べを設け、集落の人々を招き入れて観賞を楽しんできた。神楽衆も沿岸域諸地域から優れた舞い手がスカウトされて結成されている。

岩手県民間信仰事典(1991)によると、黒森神楽の権現様は岩手県に現存する最古のものとして、1678年には現在のような巡行の形態が確立されていたという。なぜか長い期間、広域から厚い信仰を得、自由に移動できたかは不明であるが、二つのポイントがある。一つは黒森山(標高330m)が三陸沿岸の漁師から「当て山」とされ、守り神のような存在だったことである。もう一つは神楽が沿岸域の人々の暮らしに深く根差した芸能であったという点である。過去、自然災害や不漁の翌年は神楽は盛大に舞われてきた。沿岸の人々にとって、神楽は鎮魂と再生のシンボルであったのだろう(写真-2)。調査では神楽の暦と人々とのつながり、神楽の意味等を文献調査とヒアリング調査により、明らかにした。

### (2) 食と生業の四季

宮古の人々の食と経済を支えてきたサケやサンマなどの魚、ワカメ、コンブなどの海藻といった海の幸の四季と、キノコや山菜など



写真-2 黒森神楽の代表演目「山の神」

の山の幸、それらを活かした食の暦をヒアリングし、それらをフェノロジー・カレンダー(季節暦)にまとめる作業を行った。

### 3. エコツアーとガイド研修

#### (1) 実証実験「エコウォーク」

2012年度は宝探しの成果を応用したエコツアーを企画、実施した。そのねらいは①宝を活かしたコースとプログラム開発、②宮古市が主体となったエコツアー運営の体験共有、③住民ガイドの育成、④来訪者との交流体験など複数に及び、実験終了後にソフトが残ることなど、多岐にわたった。ここでいう「エコウォーク」とは、日本エコウォーク環境貢献機構が各地で支援しているもので、地元ガイドによる案内・解説を受けながら歩き、参加費が地域の環境保全に還元されるしくみである。

具体的には「宮古人のコスモロジー」をコンセプトに次の2つのコースを企画した。

(i) 海・山・人・神をつなぐ黒森神楽：黒森神社総代会の方々のガイドにより山口集落から黒森神社までを歩き、黒森神楽講演会と神楽を鑑賞する。

(ii) 三陸の宝・陸中海岸と田老へ復興する宮古の自然と生業を訪ねる：田老海岸から三陸復興国立公園の一部となる東北海岸トレイルを歩いて沿岸域の自然を体験し、観光協会による「学ぶ防災」ガイドから津波の実態を学び、復興目覚ましい漁協の話聞く。

実施概要は以下の通りである。

#### 1) プレウォーク

8月4日に二戸市職員および住民をモニター



写真-3 エコウォーク「田老コース」

とし、2グループに分かれて試行を行った。

#### 2) エコウォーク

10月13日に黒森コース、14日に田老コースのウォーキングを実施した。

いずれも宮古観光協会を事務局とし、宮古市、環境省宮古自然保護官事務所、黒森神社総代会が協力する形で実施した。ガイドは黒森コースは黒森神社総代会、田老コースは環境省宮古自然保護官事務所に所属するパークボランティアと宮古観光協会「学ぶ防災」チーム、田老漁協とが担った。

一般公募の参加者各20名は黒森神楽の卓越した美しさや三陸海岸の自然のダイナミックさに感嘆の声を上げ、山海の幸に舌鼓を打ち、「また来るね」という声を残して帰って行った(写真-3)。

#### (2) 人材育成と組織づくり

調査3年度目に入った現在、宮古市では実証実験の担い手を中心にガイドウォークの継続と組織づくりの検討のフェーズに入り、3月に二戸市で1泊2日のガイド研修を実施した。

### 4. エコツーリズムによる震災復興支援

観光の語源は「国の光を観る」である。本プロジェクトは地域の危機にあっても宝を掘り起し光らせることが、その地を訪れるを生み、地域内外協働による復興支援に結びつくことを示した。エコツーリズムと宝探しが復興支援の力となりうることを示したと言える。またウォーキングによる宝とのふれあいが、地域外の人々にとって地域がもっている「物語」の追体験となり、住民にとっては誇りを新たに、来訪者にとっては好奇心を満たすものとなることも明らかにした。今後も外部研究者として本プロジェクトを継続しつつ、徐々に宮古の人々による自律的運営へと移行できるよう支援したいと考えている。

#### 引用文献

- 1) 岩手県立博物館(1991): 岩手民間信仰事典: 岩手県文化振興事業団, 119